
EFFECT

マスカレードF

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

E F F E C T

【Nコード】

N 9 6 7 3 0

【作者名】

マスカレードF

【あらすじ】

大学生の主人公は両親が再婚することにより、四歳の妹が出来る。彼女は霊を見ることが出来るのだが、主人公始め家族皆信じていない。

ところが、両親の長期新婚旅行時に主人公が友人数人を妹に合わせたことにより主人公の想定外の出来事が発生することになる。

一応「霊」ということで少しグロい描写が入るかもですが、基本グロくも怖くもないです。分類はなんになるんだろう。冒険？（笑）

00:プロローグ

ママがしんぱいだったから……

そう、消え入りそうに小さな声で呟いて、紗希は天使のような顔を俯かせた。

真っ赤な夕陽が窓から差し込んできて紗希の長い栗色の髪をきらきらと輝かせている。

大きな目から溢れた涙が真っ白な頬をつたい落ちる様は芸術的といっても過言ではない。

震える腕で「お友達」の兔のぬいぐるみを抱きしめる姿は見る者の庇護欲を掻き立てる。

ああ、可愛いなあ……

……などと現実逃避している場合でないのは分かっている。

分かっているのはいるのだが、こんな現実受け入れたくないし、受け入れたとしてどう打開すればいいのか平凡なる一大学生の俺には皆目見当がつかない。

そしてそれは単に俺が不甲斐無い男だからというわけでは決していないというのは、この場にいる他の男達も俺同様阿呆のように立ち尽くしていることからわかってもらえるはずだ。

紗希の瞳から二粒目の涙が零れ落ちたと同時に、俺達の目前、美

しい夕陽差し込む窓の外、頭の禿げ上がった中年男が落下していった。

かれこれ三度目である。

ここは二十三階建マンションの十五階。くたびれた中年男性が落下していくなど、事故か自殺か、いずれにせよ善良な市民ならばそれを目撃した以上、早急に救急車なり警察なりを呼んでしかるべき状況である。にもかかわらず、俺達良識ある大学生男子四人（と幼女一人）は揃いも揃って立ち尽くしている。

なぜか？

それはなにも人間が高層建築物から落下する瞬間を目にしてビビッているわけでも（確かに最初は驚愕したが）、連続して何人も飛び降りている異常さに恐れをなしているわけでもない。

：先ほどから落下しているのが同一人物であるという、論理的にあり得ない状況を目にしているためである。

そんな風に思考を飛ばしかけている俺の前で、信じられないならもう一回見る？と言わんばかりに、満面の笑みを浮かべて禿げ親父が通算四度目ともなる飛び降りを敢行していった。

01：再婚

いい歳してよくやる

というのが二十も年下の女性と再婚すると父から告げられた時の感想で。

こんな男でいいんですか！？アンタならもっとイイの狙えるよ！

というのが件の女性の写真を見せられた時の感想だった。

ふわりと微笑む写真の彼女は色素の薄い日本人離れた美人で、「上流階級のお嬢様」のような澄ました気品に溢れていた。

もっとも実際の彼女は、三年前に旦那を亡くしてからはフリーカメランといういまいち収入不安定な職業ながら、色々な副業をしつつ女手一つで幼い娘を育ててきたという大層エネルギーな女性だったのだが。

気品溢れる容貌の割に大雑把で明るい彼女が、「良く言えば楽天的悪く言えば馬鹿」な父とウマが合ったのは、まあ、そう不自然なことではなかったのかもしれない。

とはいえ俺にはこれほどの美女を惹きつけるだけの魅力を父に見出すことはできないのだけれど。

「話にきいてた通り、優しい子なのね」

ニコリと笑った彼女を、母と思うことはきつと無いと確信しながら「そうでもないです」

と俺はモゴモゴ返した。

上品に笑いながら、少し心配だったのだと彼女は続けた。

なんでも、四歳になる彼女の娘 再婚すれば俺の妹となる

はどこか変わったところがあるらしい。

例えば、気づけば何も無い空間を見つめていたり、どこか不思議な話を母である彼女に話すことがあるのだそう。

良く理解できない話で少し気がかりではある、とはいえようやくしゃべり始めた子供のこと左程深刻には考えていないのだけどね、と彼女はまたコロコロと笑った。

まあ、幼児というのは不思議な感性を持つ生き物だ。彼女の言う通り、大人には理解し難い言動を取ることは大騒ぎするほどのことじゃあ無い。医者にかかる必要性が出てくるのはよほど酷い場合くらいだろう。程度にもよるが、さして変わった子供でもなさそう。

「猫みたいなの女の子ですね」

と適当なコメントをしたにもかかわらず

「やっぱり達樹君は優しい子ね」

と彼女はそれはそれは美しく微笑んだ。

父親に対して嫉妬する日が来るなんて思いもしなかったよ、畜生。

02：初対面の記憶

妹と初めて顔を合わせた時の衝撃を俺は一生忘れない。

雲一つ無い青空の下。

こういつ日こそピクニックだ！と唐突な父の電話で叩き起こされた日曜日。

前夜から男四人で酒飲んで徹マンという、心底断りたい状態の中で妹を紹介するから、と強引に酒臭い部屋から呼び出されたあの日。

間違いなく、彼女は俺を変質者と思っただろう。

公園に沿って植えられたつつじの大群を背景に、降り注ぐ陽光の中、光を浴びて亜麻色の髪がふんわり揺れていた。真っ白な肌、髪の色よりも深い茶色い眼に赤い唇。腕に巻いている朱珠の腕輪が子供の華奢さを、白いワンピースがその美しさを引き立たせていて

天使が存在するならば、きっとこういう姿形をしている

そう俺はあの日確信した

念のため主張しておくが、俺はロリコンではない。子供を一般的な意味で可愛いと思うことはあれ、美しいと見とれたり、まして性的な対象として見た事など一度として無い。

その俺が。

気づいたら涎が垂れていた……のは酔っていたからだと思いたい。少なくとも、性的に見とれた訳ではないことは再度主張しておく。むしろ、真逆、つまり清廉で透明な美しさ、触れてはならないと感じさせる崇高さ。

要するに天使。

などと涎垂れ垂れで見惚れていた俺はというと、涎だけでもかなりアレだというのに、その子供のものであるう、黄色いゴム製のボールの上に腹ばいになって道端に転がっているというなんとも不審かつ情けない姿を晒していた。

俺の腹の下で、俺の重みを受けてペシャンコになっているゴム製ボール。

幼児には不可能であろうが、俺は転がってきたコレを拾おうとして足を絡ませてこの体勢になってしまっているということをつかなくて欲しかった……。

そんな俺に天使　俺の妹、紗希、がかけた初めての言葉は…
うん、思い出したくない辛い記憶だ。

まあ、初めて聞いた紗希の声が、天使に相応しい純正可憐なものであり、内容はともかくとしてそれが大変耳に優しくかったことだけがせめてもの救いであつた…かな。

03：朱い数珠

「あれ、もしかしてこれ、数珠？」

紗織さんの作った「舞茸とホウレン草のさっぱりパスタ」を食べ終わって、紗希の塗り絵を手伝っていた。

見本ではピンクの色をしたうさぎが、紗希によって緑に染められていく。

父が紗織さんと再婚して二ヶ月が経つ。

『涎を垂らして道端に蹲っている男』という、なんともアレな第一印象であつたにもかかわらず、妹の紗希は俺を兄として慕ってくれているようで、達兄、達兄と俺の後をポテポテ付いて回ってくる。そしてそんな娘の姿が彼女を喜ばせたのだろうか、俺の若き母となつた紗織さんも俺を大層気に入ってくれているようだった。

大学入学以来一人暮らしを始めたこともあつて家族と食事を取ることとはほとんど無かつたのだが、「せつかく近くに住んでいるのだから夕飯くらい一緒に食べましょう」と聖母の微笑みで紗織さんに、「さきちゃんとも！」と天使の笑顔で紗希に、誘われれば断れるはずもない。

正直に言えば、俺は父の底なしに明るくお人好しな（悪く言えば

馬鹿な)性格が大の苦手だ。妻も息子もいなくなった癖に、友達が入り浸っている俺のワンルームマンションよりよほど明るく人好きのする雰囲気を漂わせていたこの実家も嫌いだった。

なにがそんなに俺の嫌悪感情を刺激したのかは自分でもよく分からない。

まあ、あえて言うなら、父とこの家は、客観的状況に似つかわしくない幸福な空気を発し過ぎていて、それが俺にはどこか薄気味悪く感じられていたのだろう。親父が元気で楽しそうなのが気に食わないなんてどんな根暗だよ、と友人が心底呆れた顔をしていたのを思い出す…が、気に入らないものは気に入らないのだから仕方がない。

しかし、今、新たに美しく元気な家族を得て、ようやく明るい雰囲気だけが先行していたココに幸せな客観が追いつきピタリとうまく嵌ったように感じられる。

俺が友人からの遊びの誘いをことごとく断って、夕飯を食べる為だけに毎日毎日ココまで自転車を飛ばすのは、ようやく薄気味悪さが払拭された家と新しい家族への祝福と配慮のため…別に紗織さんと紗希に釣られているわけでは断じて無い…はず。

そんな愚にもつかないことを考えつつ、紗希が彼女の指よりも太いクレヨンを生懸命握って色塗りに励む姿をボケっと見つめていた時だ。

ふと、彼女の腕にいつも巻きついている、細い腕には不釣り合いな重量のある朱珠が目に入ったのは。

「じゅず?」

色塗りの手を止めて紗希がたどどしく聞いてくる。

「そう。いつも付けてるからおもちゃかと思ってたんだけど、結構ちゃんとした数珠っていうか……」

「じゅずってなあに?」

「んん? ああまあ…法具っていうか。何て言えばいいのかなあ。ね、ちよつと見せてもらえる?」

未だにじゅずう?と首を傾げる紗希の白い腕をとって朱珠をよく観察する。

透明感があるような濁っているような何とも判別しにくい朱珠はずしりと重く、俺が母の葬式で手にしたものは随分と違うように感じる。珠数は百八珠であろうか。酷く年季を感じさせる。

「これ、どうしたの?」

思わず疑問を口にして後悔した。

紗希の父は事故で亡くなっていたはずだ。もしこの数珠がその件に関するものであるのなら、幼い彼女が父親を記憶しているようがいまいが、そう軽々しく口にしていい話題とは思えなかった。

04：朱い数珠？

「ああ、それね、昔近くにあつたお寺の御住職様に頂いたのよ」
「やっぱり教えてくれなくていいよ、と言おうとした矢先、俺の後ろから朗らかな声が答えた。

「主人を亡くしてしばらくの間九州の方にいたんだけど、その時ご近所だった御住職夫婦が凄く良い人達でね。仕事とか色々大変だった時によく紗希ちゃんの面倒見て下さってたの。ほら、紗希ちゃんも覚えてるでしょ？ごじゅうしよくさまとたえこおばちゃん」

父と一杯やるつもりなのだろう、紗織さんの両手はビール缶で塞がっている。

「うん！さきちゃん覚えてる。達兄あのね、さきちゃんね、かくれんぼですぐにごじゅうしよくさま見つけられるんだよ！いつも大きい石の後ろに隠れてるの」

にこにこしながら紗希が楽しそうに教えてくれる。

こんな感じ、と紫のクレヨンで住職夫妻のつもりなのだろう生物を画用紙上に描いていく。

「へえ上手いね」

…紗希が嬉しそうに笑ったから結果オーライだが……幼児の絵ってどう褒めればいいんだろうな。

しかしまあ亡くなった父親とは関係無かったようで、無神経な男にならずに済み内心安堵する。

「そっか、コレ御住職様にもらったんだ。いつも腕につけて、ずっと大事にしてるんだね」

えらいえらい、と紗希の頭を撫でながら言う俺に紗織さんが苦笑する。

「お風呂の時くらい外しなさいっていつてるんだけどね」

「えっ、お風呂の時も付けてるんですか？」

これには驚いた。それはちよつと、どうなんだろう。

「紗希、お風呂の時は外した方がいいんじゃない？石はともかく、紐の部分とか濡れちゃうとマズイでしょ？」

諭す俺を、もっと言ってもっと言つてと紗織さんが冷えたビール缶でせつつく……冷たい。

しかし紗希は頑なだった。

「嫌」

一言はつきりと言い放ち不貞腐れた顔でそっぽを向いてしまった。この年頃の子供にしては我侭でない、むしろ聞き分けが良すぎるくらいに紗希にしては珍しい。

「だって外さないと、腕をきれいにできないよ？お外で遊んだりするだろ？」

「このままでいい」

「数珠もべしやべしやになるだろ？」

「このままでいい」

「紗希」

強く言つと紗希は俯いて黙ってしまった。

そのまま沈黙が続く……初めてみる紗希の頑固な一面だ。

正直、扱いに困る。

「あゝ…達樹君でもダメかあ。いつもこうなのよ。普段我侭とか言わないのにな」

どうしたもんだか、と紗織さんが困ったように笑って俺に押し付けていたビール缶を離れた。

達樹君の言うことはよくきくからイケるかと思っただけ…と
いう言葉に後押しされ俺が再度紗希の説得を試みようとした時だ。
ドシンとした重みを背に受け反射で「ぐえ」と蛙が踏み潰された
ような声が漏れる。

「別にいいじゃねえか。紗希は約束守ってるんだもんな？」

05：朱い数珠？

「なんだよ…約束って」

無遠慮に俺を踏みつけて俺越しに紗希の頭をぽんぽん撫でている父に無然と問う。紗希を見れば、さっきまでのぶーたれ顔はどこへやら、にこにここと「パパ」なんて甘く父に懐いている。

その親父は「パパ」なんて柄じゃないだろ。

「俺に聞くな。本人に聞け」

割り込んで来たくせに、この話題に加わるつもりは無いらしい。紗織さんの手にある缶ビールを一つ取るとぶらぶらとテレビ前のソファに戻っていく。

ああ、そうさ。父はこういう男だ。

溜息を堪えて紗希に向き直る。

「紗希」

声を掛けると、綺麗な茶色い瞳がこちらを見つめ返した。紗希の機嫌を治してくれたことだけは父に感謝して。

「今父さんが言ってた『約束』ってなに？達兄にも教えてくれない？」

あれから十五分弱、俺は妹のつたない日本語を我慢強く聞いていく。

妹の話はさすが四歳児というか、行ったり来たり、不要なエピソード満載（例えば住職といつも食べていたおやつの話とか）という非常に忍耐を要するものであった。が、まとめるとすれば。

- 一・妹はなにやら普通の人間には見えないものが見えるらしい
- 二・その普通は見えない何かの声だか鳴き声だかが聞こえるらしい
- 三・家族や住職という時は比較的に見えないらしい

「幽霊とかおぼけとか、そういうのが見えるってこと？」

「分かんない。なんか黒くてモヤッとしてるの」

「いつ頃から見えるの？」

「ん〜？ごじゅうしょくさまといた時はいたよ」

……正直、一生懸命話してくれている紗希には申し訳無いが、俺は既にこの話題に飽き始めている。

彼女が虚言を吐いているとは思わない。しかし、所謂『霊能力』だとか『超能力』だとかを彼女に認めるには幼児の自己申告のみではなんとも…ね。むしろ、住職といた頃というのは彼女が父親を亡くして間もなくのこと。どちらかといえば精神的なものが影響しているのではないだろうか。そうであるなら、紗織さんと話し合ってメンタルケア等の検討しなければならぬかもしれない。

「でね、お引越する時にね、ごじゅうしょくさまと約束したの」

彼女の声で思考に耽っていた俺は意識を引き戻す。
そう言えば、まだ肝心な『約束』の話まで行き着いていなかった
っけ……やはり幼児の相手は忍耐が必要だ。

「ひっこしの日にね、今までお世話になりましたってママとごあい
さつに行ったの。そしたらね、ごじゅうしょくさまがね、これさき
ちゃんにあげるって」

俺の前に彼女の白い腕が翳される。

白い腕に巻きつく大きな朱珠が美しくも不気味な存在感を漂わせ
ている。

「きつとさきちゃんを守ってくれるから、絶対外しちゃダメだよっ
て」

「『約束』だよって」

「さきちゃんが分かるようになるまで絶対に外しちゃダメだよって」

「……分かるって、なにを？」

「……わかんない。だから外さない」

まるで禅問答だ。さっぱりつかめない。

「……意味が分からないな」

「お前が分かる必要ねえだろ。坊さんは『紗希が分かっただら』っつ
ってんだからよ」

ソファから親父が酒を煽りながらまた話に割り込んで来た。

本当にうざい。

「人事の様に言うなよ。今は良くても、幼稚園でプールとかキャンプとか他にも色々外さなきゃなんない場面が出てきた時どうすんだよ」

睨みつける俺に

「そんな時はそんな時だろ。紗希がちゃんと自分で決めるさ。お前は本当に心配症だなあ」

なんて軽く返すもんだから余計に腹が立つ。

「じゃ普段の風呂は？腕洗えないじゃん」

「お前の目は節穴か？洗えてんじゃねーか。キレイに真っ白な腕してんだろうが」

……これは返答に詰まる。確かに紗希の腕は真っ白で綺麗そのものなのだ。

「でも…目に見えないだけで雑菌とか……」

分かってる。もはや言い掛り。

父に言い負けたくない一心の俺の無意味な粘り。

そんな俺を面白そうに一瞥して一言。

「……酒臭い服着て道端に転がってた男の言葉とは思えねえなあ……」

完全に息子を黙らせて、父は旨そうにビールを煽った。

06・最奥の一室にて

「ううっわ！ちょっとコレはヤバくね!？」

紗織さんと紗希の写メを眺めていたら、後ろから覗き込んできた諒が叫んだ。

「すっげー美人！この美人さん達だろ!？お前の新しいママと妹ってのは」

ちよつと見ろつて！と俺の携帯を強奪して他の面子に回していく。

「これ……は。本当に綺麗な人たちだな」

正直ここまでとは思ってなかった、と瑛太が感心したように言うて携帯を宗一郎に回す。

「へえ、ホントだ。お母さんすごい綺麗な人ですね。妹さんもすごく可愛い」

一生分の運を使い果たしたんじゃないですか？なんて俺も思ってる事を述べて宗一郎が陸へと携帯を回す。

「やだホントだ〜！すっごく綺麗な人！てか妹さん、紗希ちゃんだっけ？超可愛いい〜！」

私もこんな妹が欲しい〜と陸が俺の携帯を抱きしめる。

ここは俺の通う大学のサークル塔の最上階最奥に位置する部屋。あまりにも奥に位置するため、この部屋に気づかないまま卒業する

学生がほとんどであろう、幻の部屋だ。

俺がこの部屋を見つけたのも、本当に偶然だった。

確か、罰ゲームでサークル塔の端から端まで走っていた時だったはず。

サークル塔の他の部屋とは明らかに違う、薄汚れているってレベルじゃなくボロボロな扉の、ノブに幾重にも鎖が巻かれた、いかにも『立ち入り禁止』という雰囲気を漂わせるこの部屋を見つけた。

そんな怪しい部屋を目にして踵を返していたなら、今、ここにいる彼らと関わり合いになることも無かつただろう。

ここにいる五人は酔狂にも、「入るな」という警告を無視して好奇心赴くままにノブを回した者たちである。

一見嚴重に閉鎖されているように見えた扉が思いの他簡単に開き、入ってみれば私物まみれの生活感溢れる室内に、一種の冒険を期待した俺の好奇心が一気に萎えたのを覚えている。

「いやあ、達樹ちゃんが最近ロリに目覚めたって聞いたもんだからどうしたもんかと思ってたけど。これなら分からなくもないっていうか?」

「分かつちや駄目だろ。いや、可愛いけどさ」

「いやいや冗談よ?俺は達樹と違って変態じゃないし。どっちかというところのママの方が……」

「お前が言つとマジっばいからやめろ」

好き勝手言っている諒と瑛太（主に諒）の手から携帯を取り戻す。
「俺ロリじゃないし。適当言っな」

一応訂正すれば諒が目を大きく開いて大げさに驚いた顔をする。
そんなふざけた顔さえ様になっっているのだから堪らない。かなり明るく染めた茶髪を適度に立たせた髪型がすつとした鼻梁と相まってスタイリッシュな印象を与える美形。すらりとした長身の均整の取れた体格に真似出来ない要領の良さ…神様は不公平だと常々思う。こんな人生舐めてる男に才能も容姿も授けちゃうなんて……。そのちよつとでもいいから俺に分け与えて欲しかった。

「ええ〜？ロリじゃないのお？これ、さつきからずーっとニヤニヤ見つけてたじゃん？ああ！まさかママ狙い！？」

きゃー不潔う！なんて騒ぐこのチャラ男を心底殴ってやりたい。どうせ軽く避けられるんだろうけど。

「でも大丈夫、まだその方が健全だよ」

「なんなら俺が奥様落としてのテク、レクチャーしてあげようか？」
なんて諒がしつこく俺に絡んでくる様子を瑛太が気の毒そうに見ている。

普段退屈を持って余している諒だ。俺で遊んでいるのを邪魔すれば、どんなとばっちりが自分に及ぶか分かったもんじゃない……てことだろうが、いい加減止めて欲しい。

諒と瑛太は幼稚園からの腐れ縁だという。諒のような掴み所の無い破天荒男と違い、瑛太はまだ常識的で普通の男だ。俺と同じ法学部で同学年、将来は彼の父親同様弁護士として活動したいらしい。地毛だという落ち着いた深い茶髪にブランド物の無地のシャツ（それと似たようなのを俺も持っているが値段は彼の物の方が五倍は高かった）。ぱりぱりの『優等生のお坊ちゃん』なわりに結構抜けている面が親近感を持たせるのだろう、彼に友人は多い。

幼馴染である事を除けば共通項の少ない二人が今でもよく連るんでいるのは、この瑛太の間抜けた部分を諒がなかなか気に入っているからなのかもしれない。

その彼の後ろに置いてある黄色いソファを見れば、こちらにすでに興味を失ったらしい宗一郎が通常運行で分厚い本を開いていた。彼は不健康に白い肌と真っ黒な髪をもつ一種独特な雰囲気のある男だ。学部違いで詳しくは知らないのだが、なんでも心理学部では結構な有名人らしい。一年生ながらその実験内容の高度さに、すでに大学院教授陣が注目を寄せているとかなんとか。冷静でマイペース。いつも気づけばそこにいる、といった感じで神出鬼没な奴だ。俺達先輩陣がいるにもかかわらずソファアの真ん中を定位置にしているあたり、彼の凶太さが感じられる。まあ、俺達に上下関係は無いっていうか、ココを見つけた者同士適当に部屋を共有しているだけだから別に構わないんだけどね。瑛太の次に諒の暇つぶしの被害を受けまくっている俺としては、先輩を先輩とも思わない彼の凶太さがちょっと羨ましくもある。

……などと思いを飛ばしている間にも、俺は諒によってコブラツイストをキメられかけている、なんとも危機的状況に陥っているわけだが。

「うあ痛った！ちよちよ！待って！痛い痛いって！！」

本格的にキメてきた諒に必死に訴えるが、残念ながらそれは逆効果なのはもう嫌というほど分かっている。視界の端に「うわあ」という顔をした瑛太を捕らえる。頼むから、お前の幼馴染をなんとかしてほしい。ぐうっと締められてトビそうになったその時。

「ちょっと、涼しい加減にしろよ！」

と可愛らしい声の持ち主が、俺に絡みつく悪鬼をパシリと叩いた。彼女は坂上陸。このメンバーの紅一点。黒髪のボブカットが良く似合う元気な人だ。女子バレー部所属の彼女はそっちにすることが多くて俺達ほどココに入り浸っていないけど、やっぱり彼女が来たときはココが華やぐ。女の子っているだけでいい意味で空気が変わるよね、可愛い人だから特にってのはあるのかもしれないけど。彼女は学部は違うが諒と同じ三年生で、宗一郎ほど先輩に強く出れない俺としては、彼のストッパーを買って出てくれるという面でも彼女の来室を心待ちにしている。

邪魔が入って面白くなさそうな顔をした諒がポイツと俺を解放した。

「せいぜいと呼吸を整えている俺に向かって「今度美人ママさんとお前自慢の妹ちゃんに会わせるよ」なんてヘラヘラ笑っている。

会わせるわけねーだろ！

07：家族会議

「達樹君、ちょっと話があるの」

紗織さんが妙に改まってそう切り出してきたのは、皆で彼女の作った『チキンと菜っ葉のインド式カレー』を食した後、紗希の部屋で紗希と『うさぎ太郎の冒険』を読んでいた時だった。

なんととはなしに嫌な予感を抱きながらリビングに出てみると、食後は決まってだらだらソファに寝転がっている父が中央の食卓（紗織さんが綺麗に片付けたおかげでカレー臭漂う以外は夕飯の名残はない）の席にいる。

いよいよ嫌な予感がする。

「……改まっちゃってどうしたの？」

席についてもなかなか話し始めない両親に、仕方なくこちらから切り出す。

「うん、実はね……。達樹君はコレ知ってるかしら？」

言いながら紗織さんがなにやら新聞記事を出してくる。その見出しを見て軽く頷いた。

「知ってますよ。昨日からちょっとだけ話題になってますよね。『第四の預言』の存在が一部で主張されてるとか何とか」

記事にはさほど大きくない文字で『ファティマの第四の預言発見か』と題されている。

「『ファティマの預言』っつーのは、まあ簡単に言えば昔聖母がポルトガルの田舎町ファティマの三人の娘に託したとされる大きく分

けて三つの内容をもつ言葉　ま、三つの預言だ。どの預言の危機も全て完結されたと言われている」

父が首をこきこきさせながら解説してくる。さして興味も無いが軽く頷いて理解を示した。

「で？四つ目の存在が今頃判明したってわけ？」

記事によれば三人のうち一人が生前友人に宛てた手紙にそれらしき一文があるらしい。その友人が亡くなり、遺族が遺品を整理していた際にそれを発見したとのことだ。

それは詩のようなものであるらしい。

その謎めいた文章が一人の女性の言葉の羅列なのか、聖なる母からの伝言なのか。

日本では今のところさほど話題になっていないが、一部の社会においては大事件であろうことは想像にた易い。

「さあな。内容が分からんうちはなんとも言えねーな」

…まるで内容が分かれば、「第四の預言」の真偽が分かるかのようない草だ。

「内容分かったって、父さんにはそれが預言かどうかなんて分かりやしないだろ」

「さあ？分かるかしんねーぞ？」

俺の言葉に父が口端を上げる。苛つく顔だな、本当。

というか、さっきから真偽も定かでない預言の話ばかりで二人の意図がさっぱり掴めない。

「で。それが一体なんなわけ？全然話が見えてこないよ。もっと分かりやすく簡潔に話を進めてくれないかな？」

方向性の見えない話題と、そういうふうには焦らした話し方をする父によって俺の機嫌は急降下しているのだ。それを察したのだろう紗織さんが、ごめんなさいね、と話を引き継いだ。

「実はね、その預言の内容、私達は知っているのよ」

…すみません、今度は簡潔すぎて意味が分かりません。

07：家族会議（後書き）

念のため、述べておきます。

この物語はフィクションです！

『ファティマの預言』の記述の大部分は創作です！真に受けしないで
下さい！

08：家族会議？

「第四の預言によれば、詳しい場所は伏せるけど、ある場所であつた。天より『光』を賜るそうなの。だから私と達彦さんで中東に向かうと思つて。それで達樹君には悪いんだけど、私達がない間紗希ちゃんのことを頼みたいのよ」

お願い出来ないかしら、と紗織さんが困つたように微笑んで俺を伺う。

…彼女が非つ常に簡潔に話してくれたおかげで最終的に二人が俺に何を求めているかは分かつた。つまり二人の留守中俺に紗希の面倒を見て欲しい、てことだろう。

だけどそれ以外の部分ははつきり言つて全く理解できなかった。なにがどうでなんだって!?

「俺の同期だつた水谷を知つてんだろ？」

俺と紗織さんのやり取りを見ていた父が頭をガシガシ掻きながら言う。

「知ってるよ。M大学で言語学の教授やつてる水谷先生だろ」

水谷先生は父とは大学時代からの友人で、研究員時代には二人で日夜共同研究に励んだ仲である。

「水谷のヤツは十五年前から中東の少数民族の言語を研究してんだ。アラビア語ベースなんだが世界的に見てもかなり珍しい法則性を持つ言語でな、アイツはこの十五年足繁く彼らの元に通つて研究しつづ彼らと親交を深めて来たらしい」

「ふん」

父の話は相変わらず遠まわしだ。

が、残念ながら紗織さんの超簡潔な話よりも理解可能性のあるも

のだから仕方あるまい。

観念して俺は椅子に深く座り直した。

「この民族、筆まめっつーかなんっつーか、とにかくあらゆる事柄を記録する面白い慣習というか性質があつてな、中東周辺のあらゆる事柄が詳細に記録された書物が彼らの保管庫に大量に残されているんだよ。ものすげえ価値のもんさ。学者達だけじゃない。宗教関係者や国家にだつて涎モノのお宝だ。ただネックなのはその書物がただでさえ難解な少数言語のさらに古語のようなもので記されていて解読が非常に困難な点だ。この保管庫は長老から長老へと代々引き継がれる民族の秘密で、その中の書物の解読も、ただ一人古語を学ぶ長老の職務なのさ」

なにか飲み物持つてくるわね、といつて紗織さんが席を立つ。

父と二人で向き合っていることに居心地の悪さを感じずにはいられない。

「で？それとさっきの預言の話は何か関係があるわけ？長老にだけ引き継がれる秘密の保管庫のことをなんで父さんが知ってんのかも含めて、まだ分かんないことだらけなんだけど」

「まあそう焦るな」

「焦ってるわけじゃない。父さんの話が回りくどすぎるんだよ」

言い返す俺に、わかつたわかつたと父が手をひらつかせる。

「俺にその保管庫のことを話したのは直接的には水谷、許可はとってるから間接的には長老だ。長老が水谷とその親友である俺に書物解読の補助を依頼してきたんだよ」

「民族の掟を破つてまで、なんで」

「『少数民族』が年月を経て『極少数民族』になつちまつたからさ。治安が悪かるうが、若者は都市の方へ出て行きたがるもんだ。戻つて来ない理由は様々だろうがな。世界各国の少数民族にありがちなことさ。悪ければあと二、三代しか続かない可能性が出てきた。そ

うなれば価値ある宝だ。処分する方向ではなく国家への贈与を長老は考えているらしい……が、そうする前にそれら書物の内容を把握しておきたいと考えるのは当然だろう。残る大量の書物の解読を一人でこなすのは不可能だ。そこで信頼する言語学者水谷先生とその先生が推薦する御友人の俺に依頼してきたってわけだ」

俺は有能だからなく、と大口を開けて笑う父に水谷先生の苦勞を思う。

解読能力に優れたその頭脳をただ趣味のためだけに使用する父を、何度水谷先生が説得しに来たことだろう。

「国や大学、地位のためには言わない。せめて後学のためにその頭脳を使つて欲しい」

何度も何度も懸命に説得しに来た水谷先生を、いくら長年の友人とはいえ「嫌つぷ」なんてフザケタ言葉で追い返した父を俺が心底情けなく見ていたのを思い出す。

水谷先生もよくこんな男と今でも親交をもてるもんだ。

「まあそんなこんなでここ数ヶ月、水谷と解読作業に勤しんでたんだが。そしたらみつけたって訳よ。ここまで話しゃもう分かんたろ？」

「……さっきの『ファティマの預言』……」

「とそっくりな表記がされた書物だ。それも第四の預言つきのな。どうやら聖母はポルトガルと遠く離れた中東の山中にも現れたらしい」

くつり、と父が笑った。

08：家族会議？（後書き）

またまた念のため述べます。

この物語はフィクションです。

09：家族会議？

「記録によれば、中東のマリア、つってもその民族は精霊信仰だから彼らにとつては『善良なる精霊』かな、は三人の少年の前に姿を現したらしい。そして四つの御言葉を託された、と。水谷と二人してどっかで見えた事ある話だな、なんて首捻りながら訳したが調べてみりゃあのフアティマの預言書と同内容ときたもんだ。俺も興奮したが、水谷なんかは現役の学者先生だからマジでヤバかった」

そりゃあそうだろう。宗教的大発見だ。水谷先生の喜びたるや、想像に容易い。

「いやあ本当に凄かった。右いたり左いたり立ったり座ったりだよ。もの凄え早口で学問的発見がどうやらと語っちゃ自分の舌噛んで痛がったり。かと思えば、その場をぐるぐる回り始めたり。なんか知らんが机バンバン叩いてコップ落として割ったり、それに気が付かずにガラス踏んで足切ったり……」

よほど水谷先生の反応が面白かったのだろう、父がその時の水谷先生について延々と話し出す。

今度こそ全くもって遠回り以外の何ものでもない話だ。

こういうのは早々に打ち切るに限る。

「いや水谷先生についてはもういいよ。それより四つ目の預言の内容は？」

「なんだよ。もうちよつと俺の水谷観察談を聞いてるよ」

俺の常識的要望に父は不快そうに目を細める。

「それは本筋とは全然関係ないもんだろ。どうでもいいんだよ」

「おいおい、どっちに主導権があると思ってんだ？ここで話すの止

めてもいいんだぞ」

…どうも父は俺に頼み事をしている自覚がないらしい。
どっちに主導権があるかって、こっちに決まってるんだろ。

「達彦さん。私達は達樹君にお願いしてる立場なのよ？」

俺達のためにカルピスを持ってきた紗織さんが父を窘めてくれて
いなかったら俺はこの長ったらしい会話を打ち切って帰る準備に入
っていたことだろう。

青い硝子カップの中カラリと氷が白い液体の中揺れる。

美人の若妻に柔らかに窘められて面白くなさそうにしながらも父
が引く姿勢を見せる。

「わかったよ。ふん、預言な。さっき紗織が言った通りだよ…ま
あ水谷大先生の訳によりゃ『来たれ星の待つ丘へ。汝に光を授けし
時や』……てもんだ。これには明確な日時まで指定されているんだ。
面白えだろ」

ふふん、と得意げに話す父には悪いが

「…それが預言？『星の待つ丘』とかなんとか、俺にはさっぱり分
かないけど。日時が明確でも場所が不明確じゃあ、どうしようも
ないんじゃないの？」

「俺も場所は分からない。だが長老には心当たりがあるらしい。ま、
考えてみりゃそうだよな。ご先祖様が子孫に残した書なんだ。彼ら
にしか分からんようにしてても不思議じゃない」

しかしまあ、と父がカルピスを煽る。

「長老は俺達以外の言語学者達に古文書解読の補助を依頼していた
んだが、そいつらじゃなく俺達がこの預言書を解読したつてのは、
長老たちにすりゃすげえ幸運だと思ってたんだよ。俺達は無宗教じ
ゃあないが中東問題に絡んだ宗教を信仰してねえし、古くまで遡り
や彼らと同じ精霊信仰だ。預言の日まで近いことだし、俺と水谷と

長老、の少数間で内密にして穩便に彼らに『光』を受け取ってもらおうと思つてたんだ……が」

このタイミングでこれだ、と先ほどの新聞記事を太い指で叩く。

「こうなりや他の奴らも必死こいて手紙の詩を読み解いて『星の待つ丘』にやつて来るだろうよ。キリスト教にイスラーム……皆我こそがと群がつて来る。またまた宗教的衝突勃発だ。まったく神様は争いごとがお好きなのかねえ。血なま臭いつたらありやしねえ」

「そんな……。たかが予言くらいで、そこまで大袈裟な」

「あゝあ……たたく本当にガキだな、お前は。宗教つてえのは社会によつちや国家や人間の根幹部分なんだぜ。信じる者にしかわかんねえ価値があんだよ。てかお前法学部なら、こういうのやんだらうがそれに、それだけじゃねえ利権やらなんやらも当然絡むしな」

「う……まあ、それは確かに……そうだけど。でもやつぱたかが予言じゃん……」

というか

「問題はそこじゃない！」

そうだ。問題はそんな予言やら宗教の価値だとかじゃなくて。

「仮に、だよ。例えば本当に親父が言うように危険な状態になるとして、だ。そこに行こうつていうわけ？親父だけ、じゃなくて紗織さんも一緒に!？」

まだ4歳の娘（と俺）を残して？

09：家族会議？（後書き）

超久々に更新。これからは定期的に更新できるよう努力します）
汗）

再度、フィクションです！創作である点ご了承ください。

10：家族会議終了

「そつだ。だからその間、紗希の世話をお前に任せたい」

事も無げに親父が言い放つ。

これは、ちよつとパチンコ打ってくるから留守番頼むね、みたいな軽い調子で頼むことじゃない。

危険な状態になり得るって言ったよね？いつ帰ってくるわけ？ちゃんと帰って来る保障は？

「駄目だよ。危ないことになるかもしれないんだろ？少なくとも紗織さんは行くべきじゃないよ。もしなにかあったらどうするつもりなんだよ。紗希はまだ4歳なんだよ！？」

ていうかそもそも

「なんで紗織さんまで中東に行くことになってんの？関係ないじゃん」

「あら、関係無くは無いわよ」

混乱する俺に柔らかな声が答える。

「私、フォトグラファーとして参加する予定なの」

一応私写真家なのよ、とどこか誇らし気な紗織さん。そういえばそんな話聞いたことがある……けど。

「カメラマンなんて必要なわけ？仮に必要として、それが紗織さんである必要はないだろ。現地で雇うとか、親父が撮るとか。他にもいくらだって代わりはいるじゃん」

そう、カメラマンの代わりはいくらでもいる。でも紗希の母親は紗織さん一人しかいないじゃないか！

「いや、適役は紗織しかない」

しばらく黙ってカルピスをかき回していた親父がいかにも面倒臭げに口を開く。

「ここは面倒がるどころじゃない。きちんと親としての説明責任を果たせ。」

「さつきも言った通り、これはまだ極秘事項なんだ。信用できる面子じゃないとダメだ。現地調達なんて危なくて出来やしねえよ。それに、じきに入国制限がかかるはずだ。ゆっくり日本で面子揃える暇もないってわけさ」

「入国制限？」

「ああ。予言が解読され次第、な。皆邪魔者は出来る限り足止めしたいだろ。アソコは案外簡単に制限かけられるから、突然制限かけてもそんな不審がられねえし。けど俺たちみてえな一般人は規制されたらアウトだ。その前に絶対入つかねえと。もたついてる時間は無いんだよ」

「ドゥーユーあんだすたん？」

なんてフザケタ調子で笑う親父の横で紗織さんはさすがに申し訳なさ気な様子だ。

俺に対して、というよりは勿論紗希に対してだろう。紗希は特別甘えた子供ではないが、一般的な4歳児として母親が長期間いなくなることは辛いものだ。今まで母子二人であったなら、なおさらに「達樹君の言うことはもつともだって、私も分かってるわ。紗希はまだ小さいし、それにいつ帰って来れるかも分からないし……。カメラマンは最悪居なくても、カメラさえあれば写真は撮れるしね」

「そうだよ。だから……」

「でも、ごめんなさい！達樹君！」

いきなり紗織さんがものすごい勢いで俺に向かって頭を下げた。美しい髪がテーブルに垂れて、彼女の白い顔を隠す。

そして

「私が、どうしても行きたいの……！」

「え」

ガバリと頭を上げた紗織さんの顔は……なんかすごい輝いてるんですけど。

「だって！もしかしたら、すごい神秘的な写真が撮れるかもしれないじゃないっつー！」

「ずいっと俺の方へ乗り出してくる。気迫に押されてその分身を引く俺。」

「光を受け取るってなにかしら！ぱーって空から光が降って来るのかしらね！？どういうアングルで撮ろうかしら。やっぱり下から見上げる形で……でもそれじゃありきたりね。あ、でも地上からふわっと包まれる感じの光かも。その場合はどうしましょ！」

キラキラ輝く顔で、マシンガンの如くアングル構成を練り始めた紗織さんに、もはや母親の面影はない。

「いや、紗織さん。だから、紗希ちゃんは……」

「紗希ちゃんは連れて行けないからね。紗希ちゃんのためにもベストショットを撮ってみせるわ！」

「いや、だから危険な……」

「危険を避けてチャイイ写真は撮れないわー！」

完全に燃えてしまっている。

別人のように熱い紗織さんを前に呆然とする俺、に対して親父は微笑ましそうに新妻を見つめている。

そしてポツリと呟く。

「なんだかんだで忙しくて、行ってなかったしな」

「行ってなかった、ってどこへ？」

聞かないでくれ、紗織さん。

なんだか……非常に嫌な予感がする。

「新婚旅行さ」

「あ……」

おげええ。

予感的中。

少し照れたように目を逸らす中年親父を、頬を染めながら嬉し気

に見つめる美女。

存在を完全に忘れられてる俺。

「水谷が邪魔だが…、少し遅れたハネムーンと洒落込もつや」

「達彦さん……」

互いの目を見詰め合いながら。

白くて細い指を無骨な男の指と絡ませて。

男のもう一方の手は亜麻色の髪へと伸ばされていく。

そして、二人の顔が徐々に近づいて。

美女がそつと目を閉じた……。

ところで俺は耐えられずに大きな音をたてて席を立つ。

全く意に介さずどんどん世界を作り上げて行く二人、を尻目に帰宅準備を始める俺。

もう嫌だ、この二人。

紗織さん、あなたは親父とは違うと信じてたのに！

実は似た者同士だった、という悲しい現実。

漂い始めた甘い雰囲気を背に、足早にドアへと向かう。

ああ、帰る前に、しばらくはリビングに入っちゃダメだよと紗希に伝えないと。

「つーわけで紗希を頼むな」

「達樹君、ありがとう。よろしくね」

ドアを出る寸前に無責任な二人の言葉がかけられる。
もはやなにも言い返す気も起きない。

「……了解」

まじ勝手だこころ

10：家族会議終了（後書き）

フィクションです。

11:二人暮らしの始まり(朝)

びびびびびびびびびびびびびびびびびびびびびび

……なにかの音がする。

……だまれ、うるさい。

……うるさいうるさいうるさいうるさい。

びびびびびびびびびびびびびびびびびびびびびび
びびびびびびびびびびびびびびびびびびびびびび
びびびびびびびびびびびびびびびびびびびびびび

……まだ鳴っている。

うるさい。

なんだ。なんの音だ……。

耳障りな音を止めるべく、そこらへんに手を彷徨わせ……。
ガツリ、と硬い物体が手にあたって倒れた。

「んあ？……なに、六時？」

ようやく静かになった物体、いわゆる目ざまし時計の表示する時間にしばし頭をひねる。

俺、なんでこんな早くにセットしてんだっけ。

目覚ましを手に、考えること数秒。

……。

ああ、そつだ。

「紗希の幼稚園だ」

キッチンの戸棚を開ければ、さすが料理好きな紗織さん。多種多様な調味料がずらりと並んでいる。

ええと。

さてさて。

何を使って何を作ろう。

弁当作りにまず着手すべきか、朝食作りが先か。

とりあえず冷蔵庫を開けてみれば、これまた食材がずらり。

こんなに二人で食べきれないだろ、と思って思い直す。

そうか、これはもとは四人用の食材だったのだ。

あのふざけた家族会議から数日。

ばたばたと二人はこの家を出て行った。

いつもの如く夕飯を食べに来た俺を待っていたようなタイミングで。

玄関先では、紗希が驚いたような不安気な顔で紗織さんの言葉を聞いていた。

ごめんね。ママ、すぐに帰ってくるからね。紗希ちゃんの絶対喜ぶお土産持って帰るからね。

ちゃんと達兄の言うこと聞いて、良い子にしているのよ。

優しい声で言いながら紗希を抱きしめた紗織さん。

おう！すぐ戻って来るからな！

なんて笑いながらガシガシ紗希の頭を撫でた親父。

それでも最後まで紗希は不安そうな、泣きそうな顔のまま、俯いていた。

「達兄……焦げてるよ」

「えっ……うわっ！！」

思考を飛ばしていた俺を現実に戻す可憐な声。

見ればいつのまにやらハムっぽいものが、（ていうか俺いつのまにハムを焼き始めたんだ）フライパンの中で黒い物体に変化しつつある。

のみならず、この物体が発生させたであろう煙で部屋中が真っ白

だ。

それはもうもくもくの状態で。

ヤバイ。

ちよつと、これ警報機鳴ったりすんじゃないね。

とりあえず火は止めた、けど。

ちよ、これ。なに。どうすんの。扇げばいいの??

なんてぱたぱた無意味に手を振っている俺の横を、さつと細い腕が横切り、換気扇のスイッチをぽちり。

あ、そうか。換気扇つけるの忘れてたわ。

そうそう、換気扇ね。

なんて関心している俺の後ろで、カラリとベランダのドアを開ける音。

…今時の四歳児ってこんなに冷静なもんなの。

俺が四歳の時って、こんなに頭良かったけ。

どこか敗北感を感じつつ、振り返った先。

にこり、と可愛らしい顔で俺を見返す天使、もとい俺の妹。

「あはは！達兄、お料理するときはねえ、換気扇つけるんだよ」

知らないの、とからかう口調でフライパンを覗き込もうとする。

その無邪気な笑顔と態度にほつと胸を撫で下ろす。

昨日はすごく悲しそうで、不安そうで、なのに泣かなかったから。聞き分けよく母親を止めなかった代わりに、その後ずっと無言で俯いていたから。

正直、このまま落ち込んだままならどうしようかと思っていた。

傷ついた幼児を癒す方法なんて、俺は知らない。

11：一人暮らしの始まり（朝）（後書き）

12：二人暮らしの始まり（昼）

「……………」

「結局どうしたんですか？」

課題らしきレポートを書き上げながらの瑛太と、例の如く分厚い本を目で追いながらの宗一郎が、俺の話を促す。

昼食を食べ終わって3限目が始まるうという時刻。

暖かい日差しが、何気に存在する窓から差し込んでいる。

こんな最奥の部屋にも窓があるということに、こっぴつ時つくづく気づかされる。

「なんだよ。俺の話聞いてたの。無反応だからてつきり聞いてないかと思ってた」

今まで独り言状態だっただけに、二人が話の続きを聞きたがっていることにいささか驚く。

まったく、聞いてたならもう少し聞いている風な態度をしてほしいものだ。

「聞ってるよ。可愛い紗希ちゃんのことなんだし」

「聞ってる、というか聞こえてた、ですけど。仲原さん声大きいから」

二人しれっとした返答。

聞きながらも手を動かせるタイプなのだろう。

何か一つのことしか集中できない俺からすれば非常に羨ましい特技だ。

「別に。その後は普通に見つけたパン食べさせて、幼稚園まで送ってから学校に来た感じ」

「朝食結局パンになったんだ。パンだけ？」

「お弁当はどうしたんですか？その調子じゃ作れなかったんでしょ？」

さっきまでの無反応が嘘のように二人が重ねて聞いてくる。

「ん。パンだけ。でもしょうがないじゃん、時間も無かったし。弁当は、行きがけのコンビニのおにぎりいくつか持たせた」

俺の返答に二人が顔を上げて見合わせる。

「うつつわ。パンだけ？頑張って作ってやれよ」

「かわいそうに……。紗希ちゃん、これからまともなモノ食べられるんでしょっか」

非難轟々だ。

え、そんなにダメな感じなの？

「いや、でもそんな時間なかったんだって。家事なんて全然やんねーし。昨日の今日で突然だったし」

一応弁解する俺に、冷たい視線を向ける宗一郎だ。

「家事やらないって、仲原さん、一人暮らししてるじゃないですか」「ああ……宗一郎、それは関係ない。コイツの家ホントすごい感じだから。もう服やらゲームやら酒やらでめっちゃめっちゃ！飯も学食とかコンビニとかで済ませてばっかだもんな。食器がそもそも無いし」

俺に代わって家に遊びに来たことのある瑛太が答える。

言いながら俺の生活環境を色々思い出したのだろう、先ほどの非難顔が呆れ顔に変わっていく。

「まあ、確かにいつもあんな状態だもんな……達樹は。そう考えると、むしろパンとかコンビニとかの方が無難で良かったかも……」

「いやいや、藤原さん。紗希ちゃん小さい子供なんですよ。きちんとしたものを食べさせてあげないと。今日だけならともかく、毎日コンビニ食じゃ病気になっちゃいますよ」

「だから、今日は時間がなかったからコンビニ弁当になっちゃったけど、毎日そんな感じにはしないって」

「本当ですか？ちゃんと栄養バランス考えて作ってあげて下さいよ。くれぐれも家を燃やさないように、ちゃんと……」

「わっかつたって！あーもー。お前は紗希のオカンかなにかですか？！」

心配しすぎな宗一郎にちょっと面倒臭くなってくる。

教育委員会のおばさんかつーの。なにが「きちんとした食事」だ。

大体、そんな、まだ一日目なんだし、ちょっとの手抜きくらいで目くじら立てんなっての。

朝食パンだけで昼食コンビニのおにぎり、くらい別に普通じゃん？

まあ……夜もコンビニ弁当になるかもしれないけど、さ。

そんでもって……明日も明後日もそうなる可能性が非常に高いんだけども。

でも、でも、きつと数日内には、多少マシな食事は作ってやれる

……はず？

……。

黙りこんだ俺を、瑛太と宗一郎が呆れたように見つめる。

「……とりあえず、今度お邪魔してもいいですか。僕、実は料理研究が趣味なんです」

和食とか結構自信あります、と宗一郎の自己申告。

なんとというか、意外なようなそうでもないような。

うん。でも。

「是非、ヨロシクお願いします」

俺は宗一郎に向かって深々と頭を下げた。

いや、ホント今度といわず今日にでも来て下さい……！

13：二人暮らしの始まり（夕方）

駅から歩いて約10分、緑の多い市民広場を抜けた先に紗希の幼稚園がある。

時刻は午後3時。

まだぼかぼか暖かい日差しの中、紗希の「お迎え」に行く俺。普段ならまだサークル仲間とかと無駄にだべっている時間だ。

横断歩道を渡って角を曲がれば、紗希の通う「楠木幼稚園」が見えてくる。

横断歩道前から聞こえていた園児達の声が歩を進めるにつれて益々大きくなる。

幼稚園の中に入るのは俺自身が卒業して以来、15年ぶりだ。

まあ、普通に「お迎え」に来た保護者として入って行けばいいのだけど、なぜか少し緊張する。

「あら、お迎えにいらした方ですか？」

到着したものの入るのを若干ためらっていると、入り口付近から朗らかな声かけられた。

見れば、数人の園児を腰にぶらさげた女性がニコニコとこちらを

見つめている。

「あ、はい。仲原紗希の兄です。うちの紗希がいつもお世話になっています」

ここの先生であろう彼女に、軽く頭を下げて挨拶する。

「いえいえ、こちらこそ。園長の椎名と申します。紗希ちゃんのお兄さんですか。いつも紗希ちゃんから話は聞いてますよ。よく遊んでくれる優しいお兄ちゃんですってね」

「いや、まあ、はい」

紗希が俺のことをいつも話している、という事実には照れてむにやむにやする俺を椎名先生が笑う。

明るい雰囲気の中で彼女が笑うと、ふわりと場がなごむ。

ふくよかさと歳が相まって「お母さん」という感じだ。

園児にも人気があるのだろう、いつの間にか腰周りにへばりつく人数が増えている。

「今日はお兄さんがお迎えなんです」

いつもは紗織さんが来ているのだから、当然の感想だ。

「ええ。……これからは僕が母の代わりに迎えに来る予定です」

俺の返答に椎名先生は不思議そうな顔をする。

「そうなんですか？でも、お兄さんまだ学生さんですよ。毎日この時間帯でのお迎えは大丈夫なんですか？」

まあ、これは当然の疑問だろう。

「学校は午前中の講義がほとんどなので、たぶん大丈夫だと思います」

答えるも、俺を見つめる椎名先生の目にはまだ若干訝し気な色が

残っている。

……困ったな。

これ以上追求されてもどう説明すればいいのやら。

両親は紗希を置いて中東に行っちゃったんです、帰国時期は不明です、てか？

しかし彼女は特にこれ以上こちらの事情を聞き出そうとはしなかった。

「それならいいんですけどね。ここらへんの治安は悪くないんですけど、万が一のことがあつてはいけませんので、必ず保護者の方にお迎えに来て頂いているんです。少し負担かもしれませんが、宜しく願いますね。……どうしても来れない時は、早めに連絡して頂ければ17時までには預かれるようにはしていますので、その場合は連絡して下さいね」

「あ、はい。分かりました」

俺に念押しした後、にっこり彼女は笑って運動場に目を向ける。

「ちょっと待って下さいね。たぶん紗希ちゃん外で皆と遊んでると思いますから……あつ、いた！いた！紗希ちゃん！お兄ちゃんがお迎えに来てくれたよー！」

肩辺りに揃えられた髪を揺らしながら、小柄な体のどこから出したのかと思うような大きな声で紗希を呼ぶ。その方向を見れば、紗希を含む数人がボール遊びに興じていた。

呼ばれて振り向いた紗希が、俺に気づいて嬉しげに手を振る。

うん、可愛い。

「達兄！」

ぴよんぴよん跳ねながらこっちに向かってくる紗希を見て、ちやんと今夜はまともな食事を作ってやるう、と心に誓った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9673o/>

EFFECT

2011年12月4日01時56分発行